主日礼拝説教「いかなる責任も放棄しない」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年5月14日

【旧約聖書日課】ダニエル書　6章10～23節

10ダレイオス王は、その書面に署名して禁令を発布した。11ダニエルは王が禁令
に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、
エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分
の神にささげた。12役人たちはやって来て、ダニエルがその神に祈り求めている
のを見届け、13王の前に進み出、禁令を引き合いに出してこう言った。「王様、
向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者があれば、獅
子の洞窟に投げ込まれるという勅令に署名をなさったのではございませんか。」
王は答えた。「そのとおりだ。メディアとペルシアの法律は廃棄されることはな
い。」14彼らは王に言った。「王様、ユダヤからの捕囚の一人ダニエルは、あな
たさまをも、署名なさったその禁令をも無視して、日に三度祈りをささげていま
す。」15王はこれを聞いてたいそう悩み、なんとかダニエルを助ける方法はない
ものかと心を砕き、救おうとして日の暮れるまで努力した。16役人たちは王のも
とに来て言った。「王様、ご存じのとおり、メディアとペルシアの法律によれば、
王による勅令や禁令は一切変更してはならないことになっております。」17それ
で王は命令を下し、ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれることになって引き出さ
れた。王は彼に言った。「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるよ
うに。」18一つの石が洞窟の入り口に置かれ、王は自分の印と貴族たちの印で封
をし、ダニエルに対する処置に変更がないようにした。

19王は宮殿に帰ったが、その夜は食を断ち、側女も近寄らせず、眠れずに過ご
し、20夜が明けるやいなや、急いで獅子の洞窟へ行った。21洞窟に近づくと、王
は不安に満ちた声をあげて、ダニエルに呼びかけた。「ダニエル、ダニエル、生
ける神の僕よ、お前がいつも拝んでいる神は、獅子からお前を救い出す力があっ
たか。」22ダニエルは王に答えた。「王様がとこしえまでも生き永らえられます
ように。23神様が天使を送って獅子の口を閉ざしてくださいましたので、わたし
はなんの危害も受けませんでした。神様に対するわたしの無実が認められたので
す。そして王様、あなたさまに対しても、背いたことはございません。」

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙二　3章1～5節

1終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あ
なたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられる
ように、2また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃れられるように、と祈
ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。3しかし、主は
真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。4そし
て、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これ
からもきっと実行してくれることと、主によって確信しています。5どうか、主
が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように。

【福音書日課】ルカによる福音書　7章1～10節

1イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに
入られた。2ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にか
かっていた。3イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに
やって、部下を助けに来てくださるように頼んだ。4長老たちはイエスのもとに
来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。5
わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」6そこで、イ
エスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、
百人隊長は友達を使いにやって言わせた。「主よ、御足労には及びません。わた
しはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。7ですか
ら、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっ
しゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。8わたしも権威の
下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言え
ば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』
と言えば、そのとおりにします。」9イエスはこれを聞いて感心し、従っていた
群衆の方を振り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わた
しはこれほどの信仰を見たことがない。」10使いに行った人たちが家に帰ってみ
ると、その部下は元気になっていた。

「助けに来てください」【こども説教のために】

最初のイースターの日から、弟子たちは、ご復活された主イエスが今も生きて共にいてくださると信じて、仲間たちとの歩みを再開しました。弟子たちの仲間は、120 人ほど。集まっては主イエスの教えや為さったことを語り合い、確かめ合い、心を一つにして祈り合ったのです。いつも仲間と一緒にいられて、心強かったことでしょう。けれども、主イエスのことを思い起こすほどに、弟子たちには、新しい思いが与えられ始めたようです。この仲間たちのことだけでなく、ほかの人たちのことをも思う思いです。

「助けに来てください」と主イエスに願う人がいました。主イエスや弟子たちのようなユダヤ人ではなく、「百人隊長」という身分のローマ人の軍人です。部下が病気で死にそうになっていたのです。自分の部下を助けたいと思って、不思議な力を持つと噂の人、イエスに助けてもらおうと考えたのです。親しくしていたユダヤ人たちに頼んで、願いを伝えてもらいました。主イエスはすぐに出かけて行かれましたが、行き着く前に、百人隊長の使いが来て伝言したのです、「**ひと言おっしゃってください**」と。主イエスはとても感心なさいました、「**これほどの信仰を見たことがない**」と。不思議なことに、主イエスがおいでにならなくても、病気の部下は元気になっていたのです。

「これほどの信仰を見たことがない」

前任地教会の礼拝堂には、聖壇正面に立派なステンドグラスが据えられていました。会堂建築の当初計画には無かったものだそうです。ところが、実施計画の段階になって、施工業者の担当者が「ぜひ設置させてほしい」と申し出られて、業者の完全な持ち出しで据え付けられることになったというのです。もともと業者としてはほとんど利益の出ない案件だったそうです。それでも、教会のような施設の建設は特別なことだからと、損得勘定ではなく利益度外視で、申し出てくださったことだったそうです。わたしが在任していたのは会堂建築から四半世紀以上も経った後でしたが、在任中に改修工事計画が立ち上がったときに教会が迷わず相談したのは、その施工業者と当時の担当者でした。そのときも、相当な無理を引き受けてくださったのです。

カファルナウムの町で、ユダヤ人の長老たちを通して主イエスに「助けに来てください」と依頼したのは、その町に駐留するローマ軍の一隊を率いる百人隊長でした。彼は、その町のユダヤ人と交流を持っていました。私財を投じてユダヤ人のために会堂建築をしてもいたのです。もちろん、彼はユダヤ教に改宗していたわけではありません。ローマ皇帝に忠誠を誓うローマ軍団の百人隊長です。自ら建築させた会堂でユダヤ人と共に礼拝するようなことはなかったでしょう。彼はそのようにして地元住民を手なずけようとしているのだ、と揶揄する者はいたかもしれません。しかし、そうであれば、彼の使いとして主イエスのところにやってきたユダヤ人の長老たちは、彼のために熱心に願うようなことをしたでしょうか、「**あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です**」と。彼らは本当に、その百人隊長が愛をもって自分たちに接してくれていると考えていたのでしょう。自分たちにとって何よりも大切な神を礼拝するところ、会堂のために、私財をも投じてくれた、と恥ずかしげもなく言うのです。どれほど信頼していたことでしょうか。

「**イスラエルの中でさえ…これほどの信仰を見たことがない**」と、主イエスはおっしゃいました。「**信仰**」とおっしゃいました。話の筋からすると、どうも宗教心のことではないようです。ただ、「信じること」です。「信頼」し、「誠実」な関係を続けることです。主イエスは、それを「**見た**」とおっしゃっているのです。百人隊長に、彼と周囲の者たちとの間に、「信じ合う」関係があることを、ご覧になられたのです。信頼関係が生まれ、互いに誠実に振舞い合う交わりがそこにある。だれもが、損得ではなく、「あなたのためなら」と労を厭わずに関わり合う者たち。その関係が、そこに生きる者の姿が、はっきり見えるものとして、そこにはある。「神の民イスラエルを自認するユダヤ人たちの間でさえ、それほどの関わり合いを築くことはないのに、ここには、それがある」と、主イエスは驚き、感心されたのでしょう。

「わたしのために祈ってください」

これは、小さな逸話です。「**御足労には及びません**」と言われた主イエスは、用無しでした。百人隊長の家にも行きませんでしたし、病人に手を置くことさえしていません。「**ひと言おっしゃってください**」との願いが伝えられていましたが、主イエスは、「病人がいやされるように」と祈られたわけでもないようです。病気をいやす奇跡をなさったのでもなく、人の生き方を変えられたわけでもありません。ただ、異邦人がユダヤ人の友人たちを頼ってでも主イエスに助けを求めた、というだけの本当に小さな逸話です。

けれども、弟子たちの教会は、これを伝えました。主イエスがお考えになられていた「信仰」とはこういうことだ、と理解したからでしょう。

百人隊長は、その部下との間でも、ユダヤ人の長老たちとの間でも、信じ合い、損得ではなく愛をもって労し合う関係を築いていました。口先だけではなく、実際に多くの責任を引き受け合っていることが、だれの目にも明らかでした。このような人が神と出会ったならば、神との間にも同じような関係を築くことでしょう。どちらが先ということはないのです。神とも人とも、信じて責任を引き受け合う生き方を始めること。それが「信仰」だと。

たしかに、「ダニエル」のような信仰は立派です。ダニエルのように神の助けを信じて揺らぐことなく宗教的な態度を貫いた先達を、わたしたちは数多く知っています。時折、洗礼を受けてキリスト信者になったら他宗教の人や親族との付き合いができなくなると心配して、信者になることを躊躇される方がいます。キリスト信者になるからには、ダニエルのように立派な信仰篤い態度を貫かなければいけない、と考えるからかもしれません。

「ダニエル」を模範にしたならば、わたしはまったくの落第信者です。そんな人間が牧師をしているなんてとんでもない、と思われているかもしれません。落第「牧師」に幻滅して教会から離れていく人は、どこにもいるのです。それでも牧師として立てていただいている以上、皆さんに願わないわけにはいきません、パウロのように、「わたしのために祈ってください」と。

そう願うのは、皆さんを信じているからです。信頼しているからです。教会に招き集められて来られた皆さんが、主イエスのご覧になられた「信仰」の交わりの中にとどまられていることを、わたしも現に見ているからです。

主イエスは、わたしたちの心の中にある「信仰」らしきものだけをご覧になられるのではありません。もっとはっきりと見えるものをご覧なのです。どういうわけか神の御前へと招かれて来た者が、神と向き合わされているところで見えるもの。神の御前に集わされた者同士が、お互いに向き合わされるところで見えるもの。そう、教会で見えるもの。主イエスは、互いに「信じること」へと招かれて来た者たちの姿を、ご覧くださっているのです。